茶の湯の持つ精神性

鈴木　チヨ

茶の湯の歴史を少し振り返りながら、その中に、精神性を見つめてみたいと思います。

茶の湯に使う抹茶の作り方、立て方、飲み方などを、日本に始めてもたらしたのは、禅宗の一派の臨済宗の栄西禅師です。当時1200年頃の平安末期から鎌倉時代にかけて政治が安定せず、天変地異が続き、仏教が廃れ、弱肉強食の世相は、末法の到来を思わせました。このような社会状況の中で、人々はあえぎ疲れて酒に身を持ち崩し、身も心も病みすさんでいました。栄西はこのような人々を救済するための一つの手段として加持祈祷のかたわら抹茶の法式を利用しました。これは心身ともに健全に立ち返る新来の妙薬として使われたわけです。

一方、僧侶たちの間でも、座禅の行に専念するに当たり、大敵の睡魔を取り払い、精神統一の助けとして抹茶を飲むことが奨励されたとあります。こうして修業の助けとして抹茶の法式は禅院だけではなく、多くの寺院に広まり、僧侶たちによっていろいろな階級の人々に抹茶を飲む風習が広められたということです。

初期の頃は薬として使われていた抹茶にいろいろな形式が加えられ、1400年代には小笠原流の礼法や能の仕舞の歩き方などが取り入れられ、服装においては、俗人はかみしも、僧侶は袈裟十徳、貴人は素おうでなければならぬという厳格な規定ができ、能阿弥により茶式が制定され、上流武家社会を中心に形を重んじた茶の湯が流行していきました。しかし、能阿弥の弟子である珠光は、お茶の礼法を形よりも心の問題として取り上げ、茶の湯の改革に心を砕き、自我に執着することを戒め、茶人の慎ましやかな心が自然とわびしい風体となって現れるのを求めたのです。従って亭主は客を敬い、客も亭主を敬い、お互いに相手を尊敬することによってお茶の道は開かれる。仏の恵は人間に対して平等である。その恵のひとはしを公平に振る舞うのがお茶の道であると力説しています。

お茶の道は、大きく分けて二つの精神から成り立っていると考えられます。一つは、「物」に焦点を当てた「数寄」であり、他の一つは「人」に焦点を当てた「振る舞い」です。「数寄」というのは、もともと風流を好む精神のことだそうですが、茶の湯においては、客をもてなす環境としての茶室をはじめ、茶道具などの「物」にこだわる精神のことを云っているようです。お茶は、「わび、さびの世界」とよく云われます。つまり「わび」：質素で落ち着いた趣きにこだわった茶室、茶道具選びをする人、また、「さび」：古びたものに感じられる落ち着きを好んだ道具を使う人といるわけです。例えば千利休は茶室を極度に簡素化することで、そこに心の贅沢を託し、同時に無執着の境地を表わそうとしました。また、秀吉のように絢爛豪華な黄金の茶室を造り、権力を誇示したのではないかと思われます。このように、こだわり方で茶室やお茶会などの趣きがかなり違ったものになってきます。

二つ目の「人」に焦点を当てた「振る舞い」は、人との交わりの中に生まれる精神です。お茶の世界ではよく「一期一会」ということが云われます。これは露路へ入ってから出るまで、一生に一度しかない出会いであり、お茶会であると思って、亭主も客も共に真心込めてこれを

行うという意味です。

相手に対する深い思いやりの大切さ、見知らぬ人と人が互いに理解し合うことの大切さは今も昔も変わりがありません。国際化が進み、異文化との接触が多くなった今日、また、情報時代のめまぐるしい緊張連続の生活、こうした日々の精神の不安といらだちを、最も端的に転換、解消させてくれるものが茶の湯に込められた精神性であると思います。

茶道の極意とする「和敬静寂」、この和敬も静寂も、すべて人の心の問題です。亭主も客も、お互いに相手を尊敬し合う心そのものが和であり、その和合の精神は人と人との清純な心の交わりであり、静寂な茶会の雰囲気の中から生まれ出てくるものだという意味合いを持っているのです。

数寄の精神だけが過剰になると道具や衣装の競争になってしまい、本来の茶の湯の魅力がなくなってしまう恐れがあります。「数寄」の持つ芸術性、「振る舞い」の持つ心と芸能性、これらが一緒になって、より美しいもの、よりすばらしいものを追求していくことに茶の湯の道があり、おもしろさがあり、これこそが人を引きつける大きな魅力となっているといえましょう。